

# BBCワールドサービスと ワールドニュース

NHK海外情報発信強化に関する検討会  
2014年12月12日 総務省

アナウンサー 社会人類学者  
原 麻里子

# コンテンツ

1. BBCワールドサービス (WS) と BBCワールドニュース
2. WS の歴史
3. WS は英国のパブリック・ディプロマシー機関
4. WS はトランスナショナルでグローバルな公共空間の構築
5. コスモポリタンな「不偏不党」から「客観性」の仲裁員へ
6. ディアスポラ・コスモポリタンなスタッフと海外拠点の強化
7. テレビ放送の強化
8. PC から携帯メディアへ & ソーシャルメディアの強化
9. メディア・アクション
10. 評価・監査
11. パラドックス

# 1. BBC グローバルニュースディビジョン BBC ワールドサービスグループ

- BBCワールドサービス (WS)
- グローバルニュース会社 ( BBC Global News Ltd. ) :  
BBCワールドニュース・チャンネルと [BBC.com/news](https://www.bbc.com/news)
- BBCモニタリング
- メディアアクション (国際開発慈善事業を担当)

# BBCワールドサービス

- WSは国際短波放送局から国際的なマルチメディア放送局へ。
- 27言語と英語でラジオ, テレビ, ネット, 携帯モ  
機器でニュースと情報提供。
- 視聴者数は1億9140万人(短波, AM, FM, デ  
ジタル衛星放送とケーブルチャンネル)。  
(BBC World Service Annual Review 2013/4)
- ネットで音声と映像コンテンツを提供し、地球  
規模の討議も行う。

- WSは「世界で最も信頼されるニュース・情報提供者であり続ける。」
- 今後は、提携局を通じてのラジオ視聴の増加を目指す。
- 現在は、各国語テレビ放送の拡大を図る。
- WSはBBCトラストと外務省から商業収入を増やすようにと求められている。

# WSの運営

- WSは「王室特許状」(Royal Charter)の下で運営され、トラストへの説明義務がある。WSは独立した編集権を有するが、外務省との関係は「BBC協定書」と3年毎に締結される「外務省・BBCワールドサービス間協定書」に規定される。そして、同協定書に英国政府策定の「戦略的国際優先事項」がWSの目的を定めることを記している。毎年、WSはその3年間計画を外務省と見直すことで合意している。WSの目的は外務担当国務相と合意され、中長期優先地域は地理的・視聴者層によって定められる。王室特許状と協定書は、BBCの政府からの独立を保障する重要な文書で、基本法規である。特許状で独立性を保障し、協定書はそれを両者の間で確認するという性格である。
- 2014年4月以降、トラストは、BBCワールドサービスのための「オペレーティング・ライセンス」(BBC World Service's Operating Licence)を発効させ、WSの権限、業務範囲、予算、主たる目的を設定している。トラストが定期的にこのライセンスに基づいてWSを評価する。

# BBCワールドニュース

- BBCの商業国際ニュース情報チャンネル。
- 英語で毎日24時間放送。毎時のニュース,ビジネス,スポーツ,天気の速報とBBCの時事番組,ドキュメンタリー,ライフスタイルの番組を放送。
- 200以上の国と地域で放送。
- 約3億の家庭と180万のホテルの部屋で視聴可能。
- 毎週7100万人が視聴。
- ターゲットは豊かで影響力のある視聴者(HPより)。
- BBC World News departmentがワールドニュースチャンネルの制作と配信を担当。
- BBCニュースグループと施設とスタッフは共有しているが,ニュースグループによって統治されているわけではない。

## 2. WSの歴史

- 1932年12月, BBCは英国本土と海外の自治領, 植民地を結ぶエンパイアサービスを英語を話すディアスポラ向けに開始。この海外放送が多言語による国際放送になった。
- 1938年, アラビア語放送, 1941年, 欧州向けの仏, 独, 伊語放送が開始。戦争終了時には全世界へ45言語で放送していた。放送開始当初は受信許可料で運営されていたが, アラビア語放送開始を境に全額外務省からの助成金で賄われるようになった。

- WSはヨーロッパのファシスト,ナチスの反対勢力への奨励によって,市民権に対する地球規模の声として道徳的資格証明書を獲得し,さらに,1930年代の反スターリン主義によって,「民主主義」へのコスモポリタンの声としてのグローバルな権威を得た。
- 第二次世界大戦後,英帝国の多くの植民地が独立し,WSは植民地の過去から開放され,罪悪感なしに,地球規模の不偏不党を主張する声で放送するようになった。
- WSを育成してきたの,1イタリア,ポルトガル,スペインのファシストとドイツのナチス2スポンサーである外務省と植民地省と編集権の独立を守る戦いである。
- 長い目で見れば,放送者たちも外務省も「国家の利益」は検閲やプロバガンダによるものではないとした。開始当時から,WSは英国の海外での利益について長期の見解を有していた。それは,コスモポリタンな文化資本と外務英連邦省の行為への不偏不党のイメージである。

### 3.WSは英国のパブリックディプロマシー(PD)機関

- 2001年の米同時多発テロ事件後,パブリック・ディプロマシーの重要性が強く認識されるようになる。⇒「新」PD
- 英国では2005年末に政府に提出された「カーター・レビュー」がパブリック・ディプロマシーを「政府の中長期的な目的に適合した形で英国についての理解を向上させ,英国のためになるような影響を与えるべく海外の組織及び個人に情報を発信し、これらと関与するための活動」と定義している。
- 英国で同政策立案に関与したレナードによれば,魅力的な国家アイデンティティは政治的、社会的資源であり,特に,経済的に大きな効用をもたらし,国家が魅力的なアイデンティティをもつことで,企業は海外からの投資を獲得し,市場で勝利を収められる。国のイメージと評価は公共の財産である。

- 新PD活動には関係を構築しようとする国々の文化と人々の必要とする事物の理解, 情報発信, 誤った認識の訂正, 双方向の対話・交流などの形で, 長期間の関係の構築が必要であり, 目標とするグループに一方的なメッセージを送るのではなく, 双方向的で国際的に共有される考えを提示するのでなければ効果を発揮しないとされている。
- 新PDは他国における市民社会との関係を構築し, 国内外の非政府関係者とのネットワークを促進し, 国内とトランスナショナルな公共圏を表象する共通の対話の構築を目的とする。このPDの概念は, 新しいコミュニケーションテクニックとして使われてきている。
- WSはPD政策の一貫として, 世界中の人々に情報を提供し, 開放した討議を行うことで, 人々をエンパワーしている。

# 英国のPD

2001年 アメリカ同時多発テロ事件。

2002年 ブレア政権パブリックディプロマシー戦略委員会 (Public Diplomacy Strategic Board) 設立。

06年 パブリックディプロマシー委員会 (Public Diplomacy Board) 設立。議長は外務担当国務相, 他5人のメンバーの中にはWS局長もオブザーバーとして名前を連ねている。

# PDは戦略的コミュニケーション

- 08年 外務省はPDを戦略的コミュニケーションの一つとみなすようになった。戦略的コミュニケーションとは、「(対象者の)態度と行動を変革するために、彼らをより効果的に理解し、より効果的な方法で彼らと連携を創りだすことによって、(情報を)伝達する体系的なアプローチ」と定義している。
- 09年 戦略コミュニケーションとパブリックディプロマシー・フォーラム (Strategic Communications And Public Diplomacy Forum) 設立。
- 外務省のPD担当大臣はWSをPDの機関として重視する姿勢を打ち出し、PDが外務省の仕事においてより中心の位置を占めることになった。
- 地球的対話、異文化間の対話はPD戦略の一つ。

# PDからデジタルディプロマシーへ

2010年 保守党と自由民主党連立政権樹立  
財政縮小政策。PDはより安価なデジタルディプロマシーへ。

2014年4月 WSの運営資金も外務省の助成金から受信許可料へ。

14年 下院外務委員会のレポートでは、外務省はWSを「ソフト・パワー」の道具とみなしている。

# ソフト・パワー

- ジョセフ・S・ナイ (Joseph S Nye) は、ソフト・パワーとは、「自国が望む結果を他国も望むようにする力であり、他国を無理やり従わせるのではなく、味方につける力」とする。そして、国際政治の場でソフト・パワーを持ちそうな国々とは問題の捉え方を規定出来る国、主流になっている文化と考え方をその時点で世界の規範になっているものに近い国（現在では自由主義、多元主義、自治が重視されている）、国内的、国際的な価値観と政策によって信頼性が強化されている国という。PDはソフト・パワーの重要な道具の一つである。

## 4. トランスナショナルで グローバルな公共圏を創造

- 現在,WSは「異文化間の対話」「イスラムとの対話」の担い手となっている。WSは「地球的対話」の場を提供することによって聴取者を連携させ、トランスナショナルでグローバルな公共圏を創造している。
- 「地球的対話」の本当の価値は経験を周辺化された人々を討論に引き込む能力である。WSは異なる言語放送間の協力で,こうした討論で今まで過少にしか表現されて来なかったコミュニティの見解と経験を取り上げることで,こうした対話を広げる能力を有する。

- フォーラムが、周辺化されてきた人々に彼らの健康・社会・経済・政治的問題に発言を促して議論を起こさせることで、彼らの指導者に問題を考えさせたり、そうした議論を世界に発信できるということ。これは、人々がファンダメンタリズム、軍事化、ネオ・リベラリズムなどによる様々な形の差別や人権侵害、社会・経済的正義と戦う目的のため、国境を越えて協力し合うというトランスナショナルなコスモポタン民主主義と新しい社会運動にも繋がっていく。
- BBCは、不偏不党、公正、正義という「倫理的威信」をそれに加え、想像上のトランスナショナルな公共圏の構築に関わっている。
- 多言語による「地球的対話」の場合、どの投稿文を翻訳するかは各言語部に任されており、言語と翻訳の選択、ジャンルとディスコースがテキストの意味に影響与えていることは否めない。

- コスモポリタンのエリート,社会的政治的環境において影響力のある人たちがPD目的の主要ターゲットの視聴者である。そして,グローバルなパブリックは,WSのようなグローバルなニュース組織を通して出現してきたもので,社会的政治的変容のプロセスにおいて触媒作用を演じている。
- 「グローバルな会話」は文化的言語的境界を超える。批判的なコスモポリタン主義はグローバルな市民社会の出現では欠くことができない。グローバルな市民社会は「グローバルなパブリック」が健全に機能することに依存しているからである。
- 「私達は真実や正義に同意しないかもしれないが,理解は合意と共有の価値を求めない。価値の争いはしばしば事実,利益と意味の争いであり,WSは,長年,利益とプラクティスと意味の争いをもつグループ間の文化の斡旋仲介をしてきた。」

## 5. コスモポリタンな「不偏不党」から 「客観性」の仲裁員へ 新しいメディア倫理

- 元ワールドサービス局長によると、不偏不党と客観性は新聞ジャーナリズムの信頼を得るためにプロの編集の規律を示すジャーナリストの規範として登場し、初期の放送でも規制化によって採択された。20世紀の大半において、これらはニュースジャーナリズムの核心であった。不偏不党は偏見がないことと関連し、客観性は事実と証拠に関係する。それらはプロパガンダ、娯楽、フィクションとジャーナリズムを分けるものであった。
- 情報供給が少ないアナログの時代はこうしたプロの規定・規則が質の確保には効果的であった。しかし、現在の情報の多いデジタル時代には情報が少ない時代に創造されたこの規範に疑問が提示されている。

- パブリックのメディアへの態度,彼らが何を信じるかは急激に変化してきている。より信頼できるメディアが必要とされ,多くの人々がこれらの規範は必要ないと言いついでしている。
- 現在必要されているのは以下の点である。
  - 1 証拠が客観性の核心。2 多様な意見が不偏不党の核心。多様な意見がなければ,社会は二極化し,多様な意見が合理的な討議に酸素を与える。3 透明性(情報源,興味,意図,方法,提携,価値観や実践の規則)が信頼を支援する。昨今,信頼性が落ちてきている。
- WSも競争相手よりはよい評価を受けているが,地球規模と優先順位の高い市場でのパフォーマンスの評価は,特に,信頼ある不偏不党のニュースの提供で急激な低下が見られる。

## 6. ディアスポラとは

- ディアスポラを自己のグループへのアイデンティティを共有するが、自然災害や政治的・経済的要因により「本来の居住地」を離れ遠隔地に一定の居場所を見いだして分離した状態の人間集団と定義する。
- WSの各国語プロデューサーのほとんどがディアスポラないしはコスモポリタンである。
- WSが客観的なニュース制作者という評価を得るには、彼らが論争を呼ぶ問題と事実について「ロビイスト」として機能するという組織内文化があったとする声もある。

# 各国語プロデューサーたち

- BBCWSとの契約終了後、  
国連、各国の放送局や新聞などへ
- BBCや英国やその価値観などを比較的よく知った人間が世界各国へ広がっている。
- ディアスポラ、コスモポリタンのスタッフの存在はPDとソフトパワーにとって重要。

# バイリンガルリポーターの数を増加

- WS 外国語放送はバイリンガルリポーターをさらに増やし、彼らによるグローバルニュースの英語による情報提供を国内外向けに行うようにする。
- The BBC World Service's Operating Licenceでは、WSは情報をグローバルな視聴者へ提供すると規定されているが、英国内の視聴者にも、国内向けの情報提供にも、国際的な深みを出すようにする。

# 海外展開とダイバーシティ

- 従業員数は約1583人。
- 約40%が英国外の59カ国で働く。
- 本拠はロンドンのブロードキャスティングハウス。

# ダイバーシティ

## WSのエスニックマイノリティ

(BBC World Service Annual Review 2013/4)

	WS 2014年 3月 31日	WS Group 2014年 3月 31日	WS Group 2017年目標
英国内のスタッフの割合	62.3%	49.9%	45.5 %
英国内のリーダー的地位	38.4%	27.4%	10%
2014年 3月 31日	女性	44.7%	

- 現在、外国語放送のニュース制作の当該国への委託が進められ、外部委託の問題が大きな緊張を引き起こしている。
- ジェーン・シートン(Jean Seaton)はこれはWSが「自治権を失い、議題のコントロールを失うのでは」という重大な懸念がある」と語る。
- また、不偏不党の維持は外国の支局ではより難しい。ロンドンよりも政治的圧力に晒されやすい。

各国語のスタッフが国内放送のスタッフと自由に往来したり(BBC Broadcasting House)

食事をしたり、ティーを飲んだりして、会話をするスペースがいたるところにある。

# 7. WSテレビ放送の強化

- 2008年 BBC Arabic TV放送開始。
- 2009年 BBC Persian TV放送開始。
- 2012年～ World Service Language TV放送  
アフリカ,トルコ,インド,パキスタン対象に  
英語,スワヒリ語,トルコ語,ヒンディー語,ウルドゥー  
語でのTV外国語放送を開始。  
地元の地上波のテレビネットワークで放送(多く  
はアナログ地上放送)。

- 2014年1月 パシュトゥー語(アフガニスタン),キルギス語(主としてキルギス向け),アフリカ向けフランス語でTV速報開始。
- 4月 ビルマ語TV放送開始。
- 3月 ウルドゥー語TV 番組 Sairbeen (週3回の速報) 新しい連携局のプライムタイムで放送再開。
- 2012年～ BBC ヒンドゥー語TV 番組 Global India (週1回30分)放送開始。

地元の連携局から放送,さらに,BBCのウェブサイトでも配信。

アフリカ向けテレビ放送を開始したいとしている。

# WS非英語テレビ放送視聴者数

(BBC World Service Annual Review 2013/4)

- 週に5500万人が視聴。
- 5630万が視聴し, 2012/3 から36% 増加。
- **Arabic** 31,500,000
- **Hindi - Global India** 6,000,000
- **Persian** 13,400,000
- **Russian bulletins and 2-ways** 3,200,000
- **Swahili - Dira ya Dunia** 2,300,000
- **Turkish** 0 (トルコ語TV放送は政治的圧力のため配信中止 180万人の視聴者減)
- 2014年2月までの調査のため、ウルドゥー語、キルギス語、ビルマ語、アフリカ向けの数字は分からない。

# ペルシア語テレビ放送

- ペルシア語テレビ放送の編成
- ニュースは半分,残りはドキュメンタリー,技術,文化,双方向番組,スポーツ,ポップミュージック番組。

毎時にニュースがあるのはイランでは一般的ではない。双方向の番組ではウェブカムとメール,携帯メール,電話で繋いでおり,一世代間離れていた離散家族を再会させたり,イランの人たちには決して放送されなかった話題を報道。

# アラビア語テレビ放送(ATV)は ニュースを中心とした硬派の番組編成で 参加型メディア

- アラブの視聴者間では、視聴者はラジオからテレビに移動し、「テロとの戦い」、イラク侵攻と占領、ハットン委員会報告書、イスラエル軍攻撃で大被害を受けたパレスチナ自治区ガザ地区住民への義援金運動の放送拒否などにより、BBCへの信頼が低下。湾岸戦争時にはCNNが大きな役割を果たしたが、その後アルジャジーラが誕生し、イラク戦争時にはメディア環境は変化していた。この流れの中で外務省のPD政策により、WSはアラビア語テレビ放送(ATV)をアラブのニュースのメディアスケープの中で、プレゼンスを再主張するために始めた。
- ジャスティン・ルイス(Justin Lewis)は、中東ではBBCニュースは「世界を定義する」性格が強いと見られていたという。それは、サイドの「オリエンタリズム」が指摘するように、西洋が非西洋の「他者」に世界や「他者」の場所を定義するということである。ここでは、「私達」(英国)と「彼ら」(中東)という言葉で語られている。

- ATVは伝統的なBBCのニュースの価値観に沿った視点でニュースを提供すると同時に視聴者参加型で、討議、討論のフォーラムを提供している。アラビア語放送のホサム・エスックソ局長は視聴者も双方向の対話をし、ニュース制作に参加する機会も有する参加型メディアであることを強調。BBCは討議の立場を取らないとするが、人々がその討議に貢献するのを可能にするという。そして、「討議のポイント」(特定の問題の討議に視聴者を参加させるフォーラム)は「政治的見解を擁護しない」「視聴者の提供する情報や考えが私たちの作品」と語り、これがBBCアラビア語放送が「世界を再創造する」プロセスだという

- 外務省の当局者は、「ATVの開放的な討議は視聴者が私達（英国）と同じ結論になることを目的」としているとし、「彼らの態度を私達にとって利益になるように変える」といっている。エスックソ局長は「世界を変える」といっている。
- 即ち,ATVはアラブの視聴者に世界の見方を教えるのではなく,自らの意見を参画させ,彼らの世の中の見方を変えていくということである。ATVの視聴者参加と討論のフォーラムの提供は,混雑するアラブのメディアスケープの中でATVをアピールするためでもあり,これは外務省のPD政策に支持されている。

- ATVは「国際的な視座」であるとし(Pfaffner 2008), BBCは不偏不党の立場をとるとしているが,議題決定権を有している。
- アラビア語放送のタリク・カフラ(Tarik Kafala)現局長は「アラブの春」のときは,アラブ各国のパブリックから放送可能な多くの情報,映像が寄せられたという。大事件の発生時,パブリックは放送可能な新しい情報を多く私達に提供する。今は,新しい取材はパートナーシップだと語る。寄せられた情報を使うか否かという編集判断がATVの貴重なブランドバリューである。従って,パブリックからの情報提供を公開するには,BBCの編集的価値観で貫く必要がある。しかし,真実,正確さ,不偏不党,多様な意見はより広い意見と視座とやりとりすることで強化されると語る。
- ニュースの選択と編集のプロセスの透明性がパブリックの信頼を維持するには重要である。
- それは、ブログや市民ジャーナリズムが様々な声を伝えるが,ジャーナリスティックな倫理を損ないがちであるから。
- アラブ向けの放送において,PDは戦場になっている。特に,アラブとムスリムの心を掴むために,地球規模の対テロ戦争に必要な意味合いがある。

## 8. PCから携帯メディアへ&ソーシャルメディアの強化

- ネットへのアクセスがPCから携帯機器へと急速に変化。
- BBCHausa's Mobile First project (携帯電話のフォーマットに合う短いストーリーを提供。)2013年8月開始。他のアフリカ放送へ広がる。
- ヒンディー語のウェブサイトもソーシャルメディア重視に変更。
- BBC Turkish Social First project (トルコ政府のメディアへの圧力によってトルコの地元放送局へ疑念が生じたため。)
- ユーザーが携帯端末で接続したとき自動的にモバイルのレイアウトに変更。

# WSのオンラインサービス利用者数

(BBC World Service Annual Review 2013/4)

platform (m)	2013/4	2012/3	Change
Any Online	1880万	14	+4.8
Direct	1080万	7.4	+3.4
Desktop	73 0万	5.6	+1.7
Mobile	360万	1.8	+1.8
Partner	84 0万	6.8	+1.6

## 9. BBC メディアアクション

- 1999年,WSは英国文化振興会とパートナーシップを組んで「BBCワールドサービストラスト」という国際的な非営利団体を設立したのが始まり。
- 目的は外部から資金を受け入れ,開発途上国でBBCの持つ資産,価値観,世界的評価,経験を投入し,メディアの力を用いて生活の質と人権の向上運動すること。
- メディアアクションはメディア教育や識字教育の他,放送を通し人々の健康・社会・経済・政治的問題への認識を高め,議論を起し,彼らの指導者に問題を考えさせたり,そうした議論をBBCから世界に発信させている。

- 各国でメディア研修を行い,優秀な人をロンドン勤務のスタッフとして採用したり,各地の情報をネットやモバイルでWSへ上げたり,現地で番組を制作してもらったりしている。
- 例 イランのケース,「アフガニスタンの女たち」

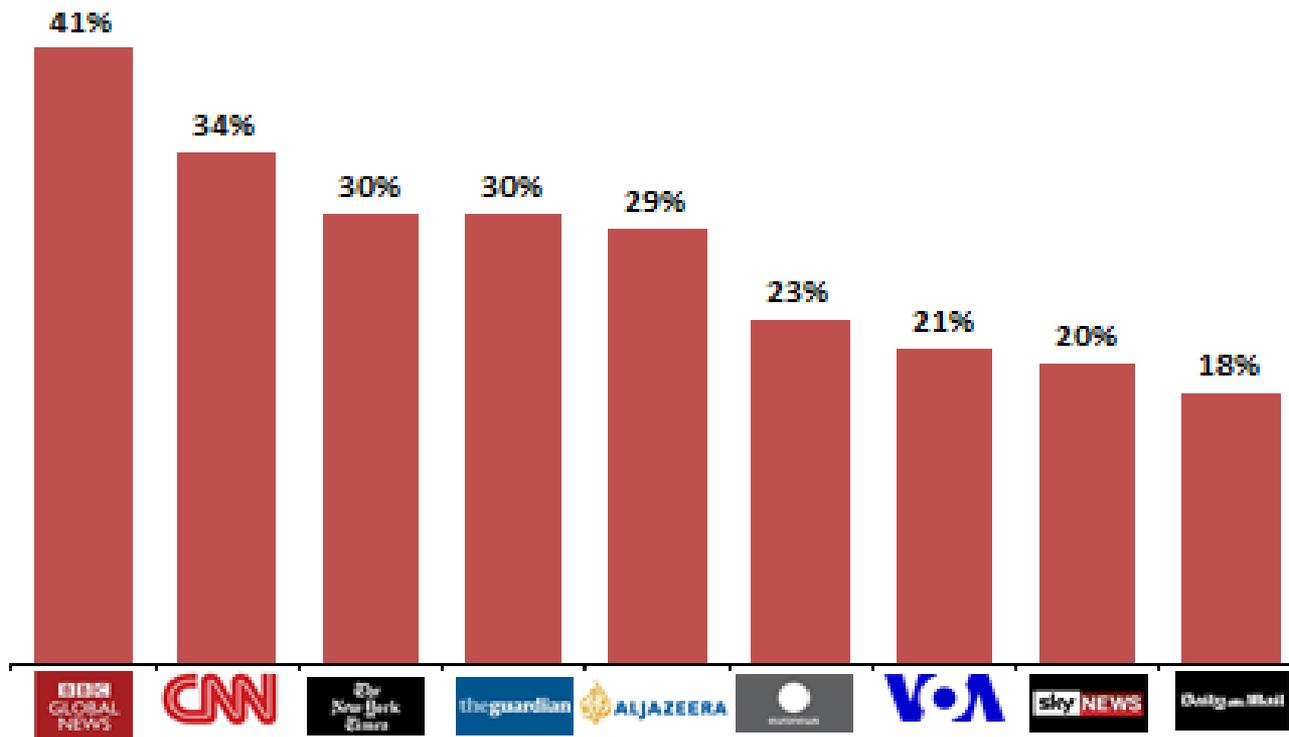
# 10. 評価監査システム

BBCグローバルニュースディビジョンも国内放送と同様に、第三者機関に放送の到達度や影響力などについて調査を依頼している。NHK Worldも評価や監査のシステムを構築すべきでは？

# BBCは信頼において他の国際放送のライバルよりも高い評価を得ている。

(Source: Kantar Media brand tracking survey November 2013. BBC World Service Annual Review 2013/4から引用)

The BBC enjoys high levels of trust vs international competitors

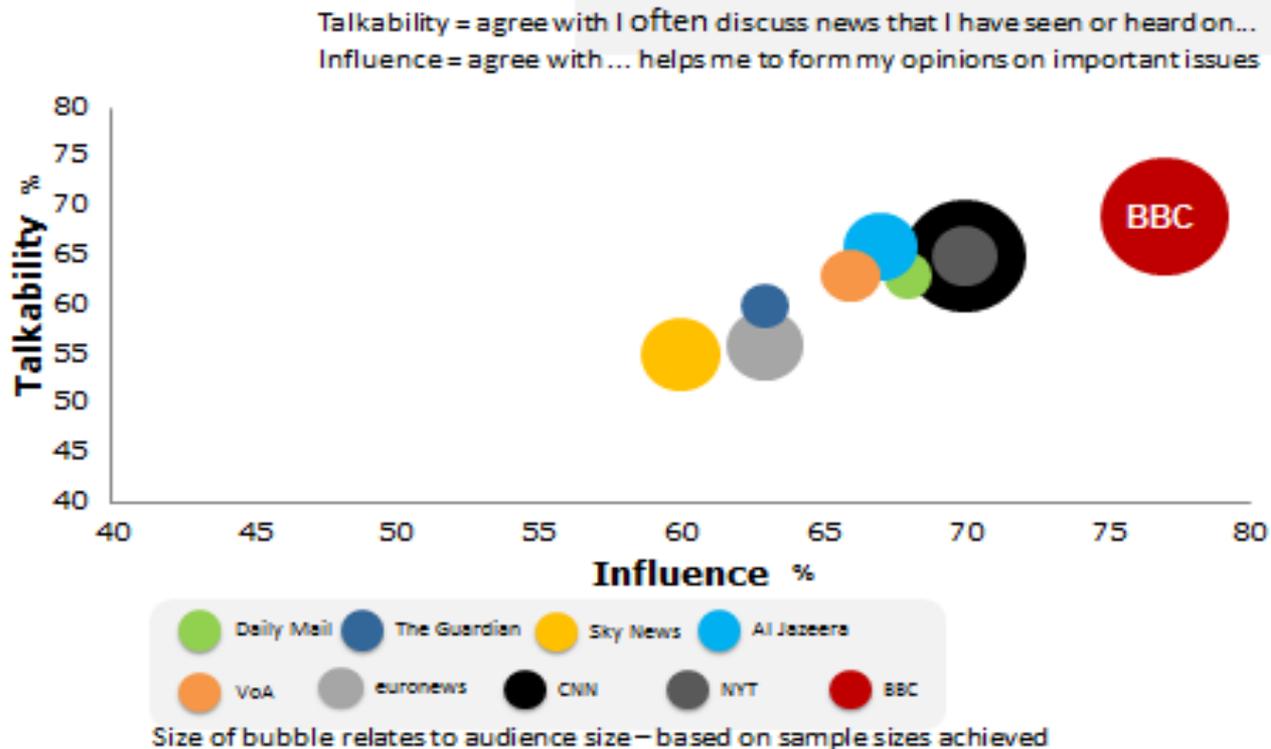


Base: All users of web news services (Does not include respondents who reported not using any news service)  
BBC - the score for the BBC overall, averaged all users of BBC's main BBC WS.

# 意見の形成と話題性

(Source: Kantar Media brand tracking survey November 2013.  
BBC World Service Annual Review 2013/4から引用)

Helps form opinions and Talkability



Base: All who have used each news service in the past month

# 調査方法

- 調査月の前月に国際放送を利用した人
- 10市場 米, ブラジル, シンガポール, インド, ロシア, ドイツ, スウェーデン, サウジアラビア (ウェブ上の質疑応答のみ)
- ケニア, ナイジェリア
- 各市場350人, 総計3500人
- 男55%, 女45% 調査対象の多くが25-44歳
- ウェブ上の質疑応答, ないしは, 対面インタビュー
- 2012年10月~2013年12月まで3回に渡って調査  
(BBC GLOBAL NEWS BRAND TRACKER Wave 3: H2 2013)

# 11. パラドックス

- WSは国際放送局で、長期間に渡り、外務省の助成金で運営されてきた。WSはPD機関であるのみならず、王室特許状などで政府の外交方針に沿うことが求められている。
- BBCは国内外の報道の編集権独立の維持を自らの理念とするが、これまで、WSの財源を政府に依存することで、国際放送発信の重点地域の選択は政府の外交政策に規制され、財源と編集権の自立性の矛盾を抱えている。しかし、WSはコスモポリタンな開放性、公正さと不偏不党であるの評判が長く続いてきた。これは、古典的なメディアのオーナーシップとコントロールの観念には興味深い挑戦である。

- WSは「国家の利益」は他の国際放送が従事しているような検閲やプロパガンダと言った種類によるのではないと気づいた。そのため、「WSは英国の外交利益は、コスモポリタンの文化資本と、外務省関係問題に対して不偏不党のイメージと夢に貢献するという見解をとってきた。勿論、自己利益から自由なコスモポリタン主義はない。しかし、WSは英国の国益をコスモポリタン主義的不偏不党なグローバル・ボイスを正確に示すことで非常に厳格につくってきたのか。編集権の独立は国際的視聴者の信頼の徽章として受けいれられている。
- WSは、コスモポリタンの不偏不党からグローバルな仲裁員になろうとして、その評価を保ち続けようとしているのかもしれないが、その背景には、英国のPD政策、WSの歴史、ディアスポラのスタッフ、そして、スタッフと聴取者で作るディアスポラ間の対話、デジタル時代のメディア倫理の変化がある。しかし、WSがグローバルな仲裁員になろうとはしても、そこには、英国のためにというパブリックディプロマシーの意図はある。

- 1999年,BBCワシントン新支局のオープニングで当時のコフィー・アナン国連事務総長は、「BBCワールドサービスは、恐らく、今世紀(20世紀)における英国の世界に対する最高の贈物」と語った。贈物とは、人類学的に言えば、与え手は与えることでプレステージを高める一方で、受け手は贈り物を受けることで道徳的義理を感じ返礼をしなければならないと思う。

# 主な参考文献

原麻里子(2011) BBCワールドサービス,原麻里子,柴山哲也編著『公共放送BBCの研究』,ミネルヴァ書房所収。

原(2014) 『BBCワールドサービスとパブリックディプロマシー～コスモポリタンな「不偏不党」から「客観性」の審判員(仲裁員)へ?～』 日本マス・コミュニケーション学会 2014年度春季研究発表会・研究論文発表。

[http://mass-ronbun.up.seesaa.net/image/2014spring\\_B2\\_Hara.pdf](http://mass-ronbun.up.seesaa.net/image/2014spring_B2_Hara.pdf) (最終閲覧日 2014年12月10日)

BBC (2014) “BBC World Service Annual Review 2013/4” ,  
[http://downloads.bbc.co.uk/worldservice/annual\\_review/bbc\\_world\\_service\\_annual\\_review\\_2013\\_14.pdf](http://downloads.bbc.co.uk/worldservice/annual_review/bbc_world_service_annual_review_2013_14.pdf) (最終閲覧日 2014年12月10日)